て共同生活を送る時、ナマけたいさいふよりも、寧ろ自ら進んで多くの勞働、若しくば困難な勞働に從事し、それが爲に名譽と尊敬とを博し、或は自己の滿足を得たいと希望する者が、決して少くあるまいと思ふ。

六

更に少し遠い將來の事を考へると、稀に謂ゆるナマケ者があるとしても『働かない者には食はせない』の、『勝手に餓死するに任せる』のと、そんな可哀相な事を云はず、それは前時代の惡癖の遺傳した一種の病人、一種の不具者と見て親切に保護を加へ、遊ばせて食はせておく事にもなるだらうかと思はれる。然し社會の富が增大して、共同生活が十分裕かになつた場合には、其位の事は問題にならないだらう。

又、いよ〳〵社會の富が增大して、共同生活が十分裕かになれば、分配の差等も全く無くなり、只だ各自が其の健康、年齢、職業等に從ひて、必要なだけを自由に貰ひ受けるといふ事にもなるかと考へられる。然しそれほど自由な幸福な世の中になれば、人の心も大いに進つた美はしいものになる筈だから、それが爲に怠惰の奬勵される氣遣ひもあるまい、即ち分配の多寡に依つて働きの奬勵を付けねばならぬ事もあるまい。